

## 一服の真心

近江兄弟社高等学校三年（滋賀県）

苗村 奈々愛

「宜しく願います」

緊張した空気の中、真のお辞儀の体勢から上体を起こすと、一瞬のうちにその空気は弛緩する。緩めるところは緩め、締めるところは締める。これが近江兄弟社高校茶道部の活動風景である。

活動のモットーは「のんびり、楽しく茶道を学ぶ」今年  
の新人部員達も、

「思っていたよりもゆったりしていて、楽しく作法が学べる」

と、和気藹々と活動している。私自身、茶道部と言えば肅々とお点前を習う厳格な部活動のイメージがあったので、入部当所はゆったりした雰囲気、拍子抜けした。皆でわいわいしながら上達していく体制に加え、お稽古中に誰かが突拍子もない間違いをしようものならば、

「あら〜、斬新ね〜」

と、お茶の先生がやんわりと指摘してくださる。さらに、美しい所作で完璧なお点前が出来る先輩や、美味しい薄茶が点てられる先輩、コロナ禍でも着実な対応を見せた前部長など「私もこうなりたい！」と思うような凛々しい方々が大勢いらっしやった。温かな雰囲気と憧憬、お点前を覚えることの楽しさも相まって、私は部活動に積極的に取り組むようになった。

令和三年。新型コロナウイルスの執念には恐ろしいものがあった。去年に引き続き、文化祭での飲食物の提供が禁止されたのである。これまで茶道部は文化祭でお茶席を設けてきた。生徒や保護者の方をおもてなしすることは勿論、三年生にとっては日頃のお稽古の集大成の場でもある。今年こそは例年通りのお茶席で先輩方のようにお点前がしたいと思っていた。悔しかったことは言うまでも無い。

確かに、茶道は「飲食を伴う会合」の最たるものである。大勢の人が茶室で一堂に会し、抹茶を飲み、お菓子を食べる。感染リスクが高まると糾弾されれば反論は難しい。それならば「松風供一啜」と一人でやれば良いという意見もあるかも知れないが、お客さんがいなければ茶道の神髄であるおもてなしの精神を発揮することはできない。人と人とのつながり、相手を思いやる心あってこそ成り立つ伝統文化であると改めて実感した。

今年の文化祭では去年と同様、実況付きのお茶席の実演

を行った。実際にお茶を飲んで貰うことはできないが、少しでも茶道の魅力をわかって欲しいので、今年は解説冊子を部員みんなで作って配布することにした。どれほど実を結んだかは分からないが、部長としてやれることはやったつもりである。

茶道はコロナ禍の世界においては、不要不急なものだと多くの人から見做されているだろう。だが、このような世界だからこそ、一服のお茶に満ちている人々の思いやりが必要なのである。この真心こそが、未曾有の危機に神経を摩耗させている私達を再生へと導く、一条の光となるに違いない。